

ライフデザイン学部での10年に感謝をこめて

人間環境デザイン学科 奥村 和正

2010年4月1日、白山で着任の辞令を受け取り、朝霞キャンパスに向かう東上線の車窓から見える黒目川の桜に感動したのを昨日のこのように覚えています。人間環境デザイン学科に着任するまで、私は31年間メーカーのデザイン部門にいました。デザイン教育の世界に漠然と憧れを抱いていましたが、当学科の公募を知り、ただただ、この先生方のチームに参加したいという一心で、いきなり大学教育の場に飛び込む決心をしました。今10年を経て、その結果に大きな満足を感じています。当初、何の準備も無しに着任し、15回の講義を3科目担当する事は想像以上の試練でした。徹夜明けで臨んだ授業にて、話し始めの20分で教室全体が眠りに落ちていく様子に落胆したものです。実務経験からの知識は意外なほど学生の興味を引かず、ゼロから取材し、メッセージの濃厚なストーリーを組み立てる必要に迫られました。デザインという行為について、共通理解を持たぬ学生達にコトバで伝えるという経験は、自分がそれまでの31年間、ただ「暗黙知」として片付けていた世界を改めて体系化する貴重な学び直しとなりました。

とりわけ、2012年夏休みに行った未来塾と名打ったワークショップで、柏樹先生主導による「デザイン思考」をメソッドとして演習に取り込む試みは、その後の私の指針となりました。「デザイン思考」とは一言でいえば、デザインする対象としてのモノはひとまず置いておいて、人間の行為を深く探ることで、全く新しい解決の糸口を発見しようとする手法です。デザインについてはとにかく作り手の職人的な情熱に焦点が当たりがちですが、そうした対象物への思いをいったん置いて、使用者である人々を深く知ることを優先することがデザイン思考の前提となります。その点で、ユニバーサルデザインを学ぶ当学科の学生には、おおいに適性があると思いました。

近年、モノだけでなく、ネットワークサービスなどのコトが組み合わせあってビジネスが行われるようになってきましたが、そこでは人間への理解が今まで以上に重要な出発点になってゆくとと思います。人間への理解を当学科の一番の強みとすべきだと思い、学生を指導してきたつもりですが、モノの形を作ることで精一杯である学生に対し、「もっと人間を見ろ」と言っても限界があり、人間環境デザイン学科にありながら、人間へのアプローチが、まだまだ不足していたという反省を持っています。そうした部分への新たな試みが若い先生方中心に進められつつあることに大きな期待感を持っています。

朝霞という地域との出会いもライフデザイン学部にも所属することで得られた大きな喜びでした。2014年に朝霞市役所から黒目川のサイン看板を学生達がデザインさせてもらうチャンスをいただきました。その作業を通じて川を愛する地元住民の方々とも交流が生まれました。その後も市役所の方々には様々な演習課題を提供、協力いただきました。目で見、足で歩いて確かめられるリアルな現場を対象に学生達がデザインを考える事ができたのは、朝霞市役所や地域の皆様の暖かいご協力があったの事でした。

こうして私のような実務者が10年間無事に務めることができたのは支えてくださった教員の皆様、

職員の皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

